

LA WORLD 020

グローバル
ランドスケープ通信
vol.20

Geschichtspark Moabit GlaBer und Dagenbach



ベルリンは巨大な墓石であるという言葉がある。世界でも有数の都市であるドイツの首都ベルリンは、現在、1990年の東西統一以降の再開発の大きな駆動力の中にある。しかし、その背景にはこれまで数々の、非常に長い歴史があるのも知られた事実である。確かにベルリンの街は銅像や記念碑が多く、街を歩く人々に多くの歴史を伝えてくれる。この公園も、その長い歴史を今に遺す1つである。



街の歴史を遺す

ベルリン中央駅のすぐ隣向かいにある Moabit prison park は、旧モアビット収容所の跡地であり、新しいベルリン中央駅の完成と同じく 2006 年に開かれた。開発が進む駅周辺に、レンガ塀に囲まれてぽつんとある公園は、周囲の喧騒とはうって変わって非常に穏やかな時間が流れている。

この公園は、メモリアルであるが、訪れる者にその歴史を押し付けることがなく、平和に環境に溶け込んでいる。それでいて、私達にふとそれを思わせ、失われる事が無い。街の歴史を遺す事は非常に重要であるが、それが意味ベルリンを落ち込ませている側面の 1 つではないかという見方もある。そのような中で、この公園は非常に興味深い事例である。



主要動線となるかつての収容棟のライン



独房を表す Blutbuche

モアビット収容所は 1849 年に建設された。収容所は中心から足が 5 本生えた形をしており、1940 年代からはドイツ国防軍によってナチスへの抵抗者の収監にも利用され、敗戦後には連合国によって利用された。1950 年頃には新たに刑務所が作られ、建物はその役割を終える事になる。刑務所は戦災による大きな被害は免れたものの、1958 年に外周の壁と一部を残して取り壊され、一時は近隣のスタジアムの駐車場として利用されていた。そしてその後、歴史・教育の為の公園として、近隣住民、デザイナー、アーティストらによる WS と並行して計画・設計が行われた。

刑務所は主に、5つの通路に枝分かれした収容所と、その通路に挟まれた3つの中庭で構成されており、その跡を習って多くがデザインされている。

まず公園中央にある立方体のモニュメントは、かつての監視室を表している。そしてその中心から延びるかつての5本の矩体は、うち2本は公園の中央を貫く動線として機能しており、近隣住民の通り道となっている。もう2本は緩やかに落ち込む芝生と上る芝生となって、収容所の歴史を大地に刻んでいる。

植栽計画においても、かつての中庭の部分には、孤独に佇む収容者のようにジャクシンの木がぽつぽつと植えられている。

一部の主要動線の両サイドには、かつての独房の1部屋1部

屋の輪郭に、ヨーロッパブナ（ドイツ語で Blutbuche、紅葉が赤く血のブナと呼ばれる）の灌木が植えられ、印象的な風景を作っている。

このように、かつて監視者によって常に見張られながら収容者が独房で孤独に過ごしていた場所が、今生きている人々の日常に組み込まれている。移り変わるベルリンの新しい街の明るさの中にぽつんとある影は、街の人にとってのアジールのように映った。

また、歴史性の敷地外部への広がりも面白い点である。かつてナチスへの反抗者として収容所に投獄されていた16人が、現在の鉄道線路の対岸にある、ULAP platz で処刑されたという歴史があるのだが、そこも現在同様に、遺構が ULAP park となって残されている。

凄まじい速度で開発されていくベルリン中央駅付近の目と鼻の先にある2つの公園は、訪れる者に平和と穏やかな時間をもたらしつつも、これからもベルリンの歴史を失わずに残していくだろう。

(取材：小田切萌)

info

Address: Invalidenstraße 54 10557
Berlin, Germany

Access: ベルリン中央駅より徒歩5分

Hours: Apr-Sep 8-21h Oct-Mar 8-16h

Fee: 入場無料

Map:

